

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-2

行き交う観光客の物騒がしい中を、どこか後ろめたい気持ちを感じた真紀は、思わず独り笑みをもらした。

道が左に折れた先の秋空に立つ、一本の高い煙突を目に留めた真紀は、いきなり既視感を覚えて、素材の煉瓦造りや、その下にある酒造工場の用途に応じた棟の配置などを思い浮かべる事ができた。

さっと涼風が吹き上げて、脇の下にうっすらと掻いていた汗と戯れる。(あなた?)と問い返した女は、しばらく立ち尽くしていたが、やおら身じまいを正すと歩き出した。

W酒造の来客用駐車場は、観月祭も重なったせいで込み合っていた。

真紀は臨時駐車場に停められた大型バスから降車した乗客が、わいわい言いながら歩いてくるのを見やりながら、土堀伝いに正面入口へと向かった。

買い物客で混雑している直売所の店先で、たまたま秋の蔵開きの工場見学のアナウンスを耳にした真紀は、今度の旅の眼目のひとつである女杜氏と邂逅する好機が、まぐれ幸いに到来したことを予覚した。

真紀は十数人の一団と共に、土蔵の中へ案内された。パレットにうず高く積み上げられた米袋の山の前で、フードキャップを被り白衣の上下を着けて長靴を履いた女性が、ハンズフリーのスピーカーマイクを使い、自らを杜氏と名乗ってから、歓迎の言葉と社歴について話し終わると、

「こちらにある酒米は、美山錦と言う品種です。三十年ほど前から長野県の地域性に合う酒米として定着しました。現在、当酒蔵では無農薬の契約栽培を始めつつあります。それでは、これから工程を順次ご覧いただきますので、足下に気を付けてお進みください」

言い添えた女杜氏の日鼻立ちを昌幸とダブらせていた真紀は、自然に満ち足りた気分になっていた。

図らずも酒蔵見学を終えて、試飲の酒の残り香を口内に感じながら外気に触れ、心地よい疲労感に包まれていた真紀は、工場の敷地に立つ巨木の紅葉に同化しつつも、その紅色を際立たせている車体を、何気なく認めた。

「あれが～」とつぶやいた真紀は、重なる偶発を気味悪がるでもなく、さもありなんと思ひ、「あなたの悪戯～」と愛おしむように、含み声で秋空へ言い捨てた。